

説話文学会 55 周年記念・北京特別大会に向けて

この度、学会事務局の要請を受けて、北京の中国人民大学を中心に説話文学会が開催される運びとなりました。早いもので、2012年に展開された学会創設50周年から五年が過ぎましたので、それに合わせて55周年記念を銘打ち、大会に準ずる形で企画させて頂くことになりました。50周年では、記念事業の一環として12月例会をソウルの崇実大学で開催、初めて海外での学会が実現しました。今回の企画はそれにつぐ海外学会になります。

近年の人文学を取り巻く研究と教育環境はきわめて厳しいものがあり、特に大学院生の減少は将来の学問の継承と発展におおなる危惧をもたらしています。多くの大学が留学生に依存する状況になっていますが、逆にみれば、おのずと国際的な環境が将来され、それが研究と境域のあり方にも大きな影響を及ぼしていると思われまます。ことに中国の場合、学部大学院を問わず、日本語科専攻の学生は日本に留学することが通常化しており、日本で学位を取得後、中国の大学に就職して学生を指導する研究者層が中心を占めるようになり、研究のあり方も大きく変わりつつあります。

近年大きく揺れ動いている中国や朝鮮半島をはじめ周辺の国際情勢を背景にしつつ、東アジアをめぐる漢文訓読、歴史文化、宗教、美術等々の研究もまた活況を呈しています。これは日本に限らず、中国、韓国などでも同様に東アジア研究が主要な路線となっています。日本文学研究も内向きの研究ではもはやどこにも対応できず、閉塞に陥らざるを得ない状態になったといえます。とりわけ説話研究は、「説話」語彙自体が中国の唐宋代には話芸全般を指す用語であり、話芸の専門家は「説話人」と呼ばれていたように、東アジアの漢字漢文文化圏に共有されていた概念であり、中国、朝鮮半島、琉球、ベトナムに及ぶ文化圏から考究されるべき課題であるといえます（漢字漢文文化圏はベトナムまで含まれるので、「東北アジア」は用語として不適切）。

ことに近年の東アジア仏教を主とする宗教研究は、欧米でもかなり進展しており、世界的な視野の目配りが欠かせない状況になっています。従来、和漢比較研究はどちらかといえば漢籍主体でしたが、漢訳仏典の意義が広範に再注目されつつあり、漢訳の具体相や教学面の注疏をはじめ、唱導面から様々に検証されています。そこでここでは、中国仏教に焦点を当てて、初日午前は各分野の第一人者による講演と、午後は「中国仏教と説話」のテーマのシンポジウム、さらには北京を主に数年来継続している『釈氏源流』読書会（「東アジア古典研究会」）の主要メンバーによるラウンドテーブル。2日目午前は、中国の説話専攻の若手主体の研究発表、午後は近年注目されつつある〈環境文学〉を軸に東アジアの宗教、言説、説話をめぐるラウンドテーブル、と盛りだくさんの企画になりました。活発な議論の展開に期待したいと思います。3日目は、北京西郊の唐、遼（契丹）時代の古刹巡りの見学で、一般の観光ルートからはずれていてなかなか行きにくい所ですので、この機会にぜひご参集ください。多くの会員諸氏のご参加をお待ちしています。

(2018.8.20 小峯和明)

説話文学会 55 周年記念・北京特別大会 “中国仏教と説話文学”

期日 2018 年 11 月 3 日 (土) ～ 5 日 (月)

会場 中国人民大学 (北京市海淀区中関村大街 59 号)

崇徳楼 (逸夫楼) 1 階・第 1 会議室

◇ 初日 11 月 3 日 (土)

午前 受付開始 8:40

開会の辞 9:10 小峯和明 (中国人民大学)

I 講演会「中国仏教と説話文学」 9:25～11:45

金 文京 (鶴見大学) 「朝鮮翻刻明伊王府刊『釈迦仏十地修行記』の金牛太子説話
について—異類と〈環境文学〉」

石井公成 (駒澤大学) 「説話としての擬経」

阿部泰郎 (名古屋大学) 「衡山恵思・聖徳太子再誕説話の地平^{ホリゾン}」

李 銘敬 (中国人民大学) 「唐宋代の往生伝の編纂と伝承—奇瑞の情景と〈環境文
学〉」

記念撮影 11:50～12:00

昼食・休憩 12:00～13:30 昼食会場: 匯賢大廈 2F・教授餐厅

昼食時に委員会 (明徳国際楼 5F・501 小会議室)

午後

II シンポジウム「中国仏教と説話文学」13:30～15:30

司会: 荒木浩 (国際日本文化研究センター)

山口眞琴 (兵庫教育大学)

講師: 馬 駿 (北京第二外国語大学) 「上代文学の文体と漢訳仏典の比較研究—時空表現
を中心に」

小川豊生 (摂南大学) 「『夢中問答』の説話学—13～14 世紀東アジアにおける「靈
性」の波動」

小島裕子 (鶴見大学仏教文化研究所) 「中国仏教文化からの創造—日本説話の中の五
台山」

コメンテーター: 渡辺麻里子 (弘前大学)

陸 晚霞 (上海外国語大学)

野村卓美 (南京大学)

吉原浩人 (早稲田大学)

III ラウンドテーブル「釈氏源流を読む」15:40～17:20

司会: 張 龍妹 (北京日本学研究中心)

河野貴美子（早稲田大学）

講師：小峯和明（中国人民大学）『『釈氏源流』の伝本』

周 以量（首都師範大学）『『釈氏源流』（仏伝部）の出典について』

高 兵兵（西北大学）『『釈氏源流』152段「法華妙典」に見る「靈山法会儼然」の出典にまつわって一日中における南岳・天台説話の異なる展開を兼ねる』

何 衛紅（北京外国語大学）「儒教説話「以豆自檢」の源流考—「毬多籌算」を読む」

夜 懇親会 17:40~19:30 中区3F・匯賢食府

◇ 2日目 11月4日（日）

午前 受付開始 8:45

IV 研究発表 9:00~12:00

司会：千本英史（奈良女子大学）

原 克昭（立教大学）

発表者

司 志武（暨南大学）「中国史伝でたどる慧思後身説—『七代記』の成立を検証する為に」

高 陽（清華大学）「南方熊楠と宋代の『夷堅志』—蔵書の書き込みを中心に」

蔣 雲斗（東北財経大学）「浅井了意の仮名草子における儒者像」

崔 鵬偉（早稲田大学大学院生）『『今昔物語集』にみる疫神・疫鬼—百鬼夜行説話を中心に』

昼食・休憩 12:00~14:00 昼食会場：匯賢大廈2F・教授餐厅

昼食時に委員会（明徳国際楼5F501）付弁当

午後

V ラウンドテーブル「東アジアの〈環境文学〉と宗教・言説・説話」 14:00~16:30

司会：竹村信治（広島大学）

鈴木 彰（立教大学）

講師：劉 曉峰（清華大学）「東アジアの時間から見た〈環境文学〉」

染谷智幸（茨城キリスト教大学）「東アジアの〈性〉と〈環境文学〉—熊楠・男色・遊郭・二次的自然」

樋口大祐（神戸大学）「東アジア/日本の自然誌と国家誌叙述」

米田真理子（神戸学院大学）「菩提樹の伝来」

金 英順（立教大学兼任講師）「韓国の野談と〈環境文学〉」

グエン・ティ・オワイン（タンロン大学）「ベトナムの説話と〈環境文学〉」

閉会の辞 近本謙介（名古屋大学） 16:50~17:00

夜 懇親会 17:30~19:20 西区・峰尚

◇ 3日目 11月5日(月)

バスツアー見学(会費制) 「唐・遼代の寺院を訪ねて」

龍泉寺、大覚寺、潭柘寺、天寧寺

午前8:30 人民大学 集合

大覚寺にて昼食

午後5:00 人民大学 解散

6:00 懇親会(希望者のみ)

主催 説話文学会

中国人民大学・外国語学院

助成 JSPS 科学研究費基盤研究(B)「16世紀前後の日本と東アジアの〈環境文学〉をめぐる総合的比較研究」(16H03389 研究代表者:小峯和明)

北京特別大会・参加要領

以下は、北京特別大会参加者のための要領です。特に北京に初めて来られる方を意識していますので、ご覧の上、種々ご対処下さい。なお、質問他、随時受け付けていますので、下記の小峯宛に E メールで御連絡下さい。

1. 航空券及び宿泊はご自分でご手配下さい。学会の登壇者及び事務局担当者は人民大学側が学内の宿舎を用意します。室数に限りがあるため、一般参加の方のご利用は難しいと思いますので、何卒ご容赦下さい。会場の人民大学に比較的近いホテルで日本から予約できるリストを下記に添付しますのでご参考にして下さい。
なお中国のホテルは、チェックインの際にデポジットを取られますので御注意下さい（もちろんチェックアウトで返金されます）。通常のホテルではクレジットカードで大丈夫ですが、ホテルによっては現金を要求される場合もありますので事前にご確認下さい。
2. 空港と市内・人民大学間の送迎は原則としてありませんが、参加者全員のフライト情報を確認の上、経験者を主体にグループ調整をするなど案配したいと思います。たとえば、羽田空港ですと、北京便は一日6便就航しています（ANA,JAL,CA）。
3. 北京空港では今年の5月から両手指の指紋のチェックが義務化されました。税関は荷物を機械でチェックしますのでご注意ください（指紋が薄いのでいつも緊張しています。以前、税関では蜜柑を没収されました）。
4. 換金は、北京空港の荷物カウンターと税関の間にある両替所が便利です。レートは1万円＝中国元600元が目安です。
5. 空港からは、タクシーをご利用下さい（地下の専用乗り場から）。行く先を紙に漢字で書いて運転手に見せれば、だいたい通じると思います。道路の混み具合によりますが、たとえば、人民大学までは小一時間で、約100元です。地下鉄（地鉄）は、人民大学東門側は、4号線・人民大学駅。西門側は、10号線・蘇州街駅が至近です。
6. 人民大学の所在地は、北京市海淀区中関村大街59号。大学が集中している北京の西北部で、北京大学より南、国家図書館や友誼賓館より北です。環状道路3環北路のすぐ北側になります。東門が正門で、東門と西門とは歩いて15分以上かかりますので、門を間違えないようにご注意ください（学会場・初日の懇親会場は東門寄り、昼食会場・委員会場・2日目の懇親会場は西門寄りです）。
7. 前日の2日早めに到着後、夕食を共に希望される方は、人民大学キャンパス内の北区食堂3階の教職員食堂（西門側に近い）で会食（会費制）しますので、出欠の返信ハガキに明記下さい。集合時間（午後6時くらい）と場所はあらためて御連絡します。
8. 学会初日・2日目の昼食と夜の懇親会は人民大学側が負担しますが、参加者が多い場合は予算の都合で会費を頂く可能性もありますので、ご容赦ください。

9. キャンパスマップ・要旨集・見学案内他、関連資料類は学会当日に配布します。
10. 3日目の見学は、すべて会費制になります。バスチャーター・昼食・拝観料など含めて一人1万円です（中国元の場合は約600元）。学会場の受付でお支払い下さい。なお、希望者多い場合は早めに打ち切りになる可能性がありますのでご留意下さい。
- 見学予定地は、北京郊外西北部から西部で、最古の潭柘寺（北魏・唐代の石塔他）、大覺寺（遼代の碑文）、龍泉寺、市街地の天寧寺（遼代の大塔）等々です。
11. 見学後、空港に向われる方は事前にお知らせ下さい。郊外を廻りますので、見学の中で抜けることは難しいと思います。
12. 見学後、人民大もしくは周辺で懇親会の予定ですが、詳細は未定（西門に近い雲南鍋料理が候補）。またあらためて御連絡しますので、ご参加の意向のみお知らせ下さい。
13. 以上、出欠の如何を、案内状に同封のハガキにてお知らせ下さい。また、Eメールでも受け付けますので、所定の事項を記入の上、早めにお送り下さい。
14. ご承知のように、北京はp m2.5など大気汚染の問題がありますが、最近だいぶ改善されつつある印象で、季節にもよりますが、好天の折りは青空がひろがり、夜は星や月が見える日が多いです。少なくとも報道されるような悪状況が常態化しているわけではありませので、一言強調しておきたいと思います。当日どうなるかは皆様の心がけ次第かもしれません（笑）。では、御来駕お待ちしております。

（記・小峯和明）

※ 連絡先 小峯和明 komine@cronos.ocn.ne.jp 又は、komine@rikkyo.ac.jp

※※ ホテルリスト

- ① 燕山大酒店 海淀区中関村大街甲38号
人民大学東門向かい側、デパート当代商城のすぐ裏手
<https://www.booking.com/hotel/cn/beijing-yanshan-hotel.ja.html>
- ② 友誼賓館 海淀区中関村南大街1号
人民大学東門側、3環路をはさんだ南側（北京日本学研究センター出講者の滞在地）
<https://www.booking.com/hotel/cn/beijing-friendship.ja.html>
- ③ 中関村皇冠假日酒店 海淀区知春路106号
地下鉄・海淀黄庄駅（人民大学駅から一駅北）、向かい東350m
<https://www.booking.com/hotel/cn/crowne-plaza-beijing-zhongguancun.ja.html>
- * 他にもいくつかありますので、ご相談に応じます。

1 司 志武「中国史伝でたどる慧思後身説—『七代記』の成立を検証する為に」

鑑真が渡日する前に慧思禅師が「倭国の王子」——聖徳太子に託生したことを知っているが為に、渡日の決心をしたというのが鑑真の弟子思託と淡海三船の鑑真伝記である。しかし、辻善之助をはじめ、飯田瑞穂などの諸氏が、鑑真と栄叡の対話（いわゆる「聖徳太子慧思禅師後身説」）を渡日後の思託の作為によったものとする意見が一般化している。そして更に、鑑真渡日伝記に関連する『七代記』が思託の創作ではなく、奈良時代の末に誰かの手によって書かれたというのは伊吹敦の卓見である。とはいうものの、強く反論する学者もいるようである。

この名高い『七代記』において慧思の第七生は達磨の勧告にしたがって、東海中の「倭国の王家」に生まれ変わって、後に片岡山で飢人の姿にして慧思禅師後身である聖徳太子と邂逅するとある。即ち達磨渡日説は聖徳太子慧思後身説の前提的な存在であるかのように見受けられる。ところが、慧思後身説と達磨渡日説は、何れも出典不明なままで、事実無根の創作として読まれてきたように見受けられる。

その上、平安時代初期の最澄および最澄の弟子光定が『七代記』を踏まえて著した『伝述一心戒文』『天台法華宗伝法偈』『内証仏法相承血脈譜』は存在しており、特にそれらは『異本上宮太子伝』をはじめ、『聖徳太子伝暦』の先行文献として重視されてきた一方で、やはり最澄と光定の著作ではないと、牛場真玄が指摘する。また、慧思後身説は『日本霊異記』『日本往生極楽記』『三宝絵』などの平安期説話には言及されていないのも事実である。『七代記』は果たして奈良時代末に成立したのかという疑問が湧いてくる。聖徳太子伝記を研究する場合に避けられない、重要な『七代記』は一体誰が何時書いたのかについて、学界の未解決の一難題になっているのが現状である。

本発表は、中日仏教交流史における代表的な人物に纏わる諸文献、特に中国仏教史伝と日僧求法目録を精査する上で、中国側のおぼろげな慧思後身説の関連記録を分析し、『七代記』の生成を検証してみたいと考える。

2 高 陽「南方熊楠と宋代の『夷堅志』—蔵書の書き込みを中心に」

南方熊楠は一般的に博物学者として知られるが、『今昔物語集』研究をはじめとするその業績は近代の説話学の始発に位置するきわめて重要な意義を持っている。中でも、中国古典や漢訳仏典を博捜し、『今昔物語集』を世界文学としての面から新たに位置づけようとした論考は、今日においても常に振り返られるべき貴重な成果である。

現在、南方熊楠顕彰館所蔵の蔵書群に見られる大量の書き込みは、従来の比較研究ではほとんど視野に入っていない貴重な資料の宝庫と言えるもので、南方熊楠が独自に日本はもとより東アジアや西洋の文献を渉猟した説話の同類話や諸資料の情報が満載されている。

発表者は、日本と東アジアの仏教説話集、特に12世紀前半の『今昔物語集』を中心に、南方熊楠の蔵書の書き込みをもとにした比較研究を課題の一つとしている。すでに、「南方熊楠の比較説話をめぐる書き込み—『太平広記』『夷堅志』と『今昔物語集』とのかかわりを中心に—」（『アジア遊学・南方熊楠とアジア』勉誠出版、二〇一一年）などで、『太平広記』や『夷堅志』、『聊齋志異』における書き込みをもとに、『今昔物語集』をはじめとする同類話の分析を行った。その際、紙数の都合で『夷堅志』について十分に論を展開

することができなかった。

『夷堅志』は南宋の十二世紀後半に成立した大部の説話集（志怪小説）であるが、日本では近時ようやく注目されつつある段階で、まだ本格的な説話研究は進展していない。近年、宋代の仏教説話集が関心を集めつつあるが、さらに『夷堅志』は注目されるべき大作で、十二世紀前半の『今昔物語集』に匹敵すると見なせる。

本発表では『夷堅志』における南方熊楠の書き込みの全貌を把握・分析し、第一に熊楠がどのような説話の読み方をしているかを跡付け、その書き込みと熊楠の論考との対応関係を明らかにし、第二に書き込みで指摘されている同類話・関連資料をもとに、『今昔物語集』他の説話本文との比較を試み、それらを通して、説話の東アジアの比較研究の位置と意義を解明したいと考える。

3 蔣雲斗「浅井了意の仮名草子における儒者像」

浅井了意の仮名草子に関する研究は従来、出典となった作品を明らかにすることが中心であり、ことに『剪灯新話』を中心とする剪灯新話系の作品や『迪吉録』などの中国善書との比較検討に力が注がれてきた。これによって、『勘忍記』、『伽婢子』などの中国古典との関連は、順次解明されつつある。それゆえ、今日浅井了意の仮名草子の研究においては、出典との関係を確定した上で、両者の表現内容上の比較を行うことが新たな課題となる。登場人物をめぐる研究も主な課題の一つである。

浅井了意に愛用された『剪灯新話』、『剪灯余話』、『迪吉録』、『明心宝鑑』などの漢籍の作者はいずれも有名な儒学者である。上記の漢籍においては、儒教的思想も宣揚しているし、数多くの儒者も登場している。周到な了意はこれらの漢籍を読んだ時、おそらく『剪灯新話』などに登場した儒者像に気づいたであろう。『勘忍記』においては、儒教の始祖である孔子及び孔子の弟子である子張などの儒教の代表者も見られるし、柔和である劉寛饒、府吏である卓茂、有徳人である楊希仲など数多くの有名な儒学者も登場している。『勘忍記』に登場した歴史上の実在人物と異なり、『伽婢子』に登場した蜂谷孫太郎や孫平などの儒者はいずれも架空の人物である。僧侶である浅井了意がこれらの儒学や儒者に対して、いったいどんな態度を取ったのかについての検討はなお十分ではなく、さらに解明する必要があると考えられる。

本発表は『勘忍記』や『伽婢子』などの仮名草子における儒者像をめぐる、出典との比較対照を行い、了意による翻案の方法や了意の儒学や儒者に対する態度について検討してみたいと思う。

4 崔 鵬偉 『今昔物語集』にみる疫神・疫鬼―百鬼夜行説話を中心に―

『今昔物語集』(以下『今昔』)における百鬼夜行説話のうち、特にそこに登場する鬼が疫鬼・疫神と想定されるものとしては、巻十四 - 四十二「依尊勝陀羅尼験力遁鬼難語」・巻十六 - 三十二「隠形男依六角堂観音助顕身語」が挙げられる。そこに描かれた疫鬼が人々に危害を加える方法として、唾や槌などを用いることがある。

唾に関しては、中国において、もともと神が人間の無礼を戒める一つの方式として、遅くとも後漢にはすでに語られていた。魏晋南北朝期に入ると、唾に病を治療する力を持つとする記録は、漢訳仏典にみられるようになったものの、鬼神が唾を用いて人間に害を与える記述は、そこにはなかった。それに対して、『幽明録』や『冤魂記』(『弁正論』所引)など志怪小説には、似たような発想が確認できる。よって、この発想は、志怪小説・仏書を通じて日本に伝わり、『今昔』に取り込まれたと考えられよう。

一方、『今昔』にみえる、槌などによって病人を虐げる目にみえない疫鬼像の形成には、『日本霊異記』や『善家秘記』から受けた影響が大きい。罪人や病人を槌で打つのは、『仏般泥洹経』など仏典にも見られるもので、そこから『日本霊異記』に取り入れられたと考えられる。しかし、『日本霊異記』巻中 - 二十五「閻羅王使鬼受所召人之饗而報恩縁」(『今昔』巻二十 - 十八の出典)には、鬼が鑿を用いて生きる人間を打ち殺して冥府に連れていく話がある。その表現とかなり相似する章段は、二十巻本『搜神記』巻十六の「黒衣客」にある。これは、鬼の描き方における『日本霊異記』、ひいては『今昔』と『搜神記』とのつながりを示唆していよう。

そこで本発表では、『今昔』巻十四 - 四十二と巻十六 - 三十二にみる疫鬼の描き方を詳細に検討しつつ、他の説話の鬼の描き方と比較することによって、そこに読み取れる疫鬼に対する認識やその背後にあるものを抽出したい。この検証により、日中両国間における鬼文化の交渉の一端が明らかになるであろう。